

大 学 ・ 専 門 学 校 の 入 試 制 度 及 び 受 験 に 伴 う 校 内 手 続 き に つ い て 説 明 い た し ま す 。

1 大 学 (短 大) 入 試 全 般 に つ い て

《 大 学 入 試 は 大 き く 3 種 類 》

大 学 入 試 は 大 き く 3 種 類 「 一 般 入 試 」 「 推 薦 入 試 」 「 A O 入 試 」 が あ る 。

【 一 般 入 試 】

学 力 検 査 で 合 否 を 判 定 。 入 試 は 年 明 け で 、 1 月 中 旬 の セ ン タ ー 試 験 (今 年 度 は 1/17・18) か ら 始 ま り 、 2 月 ~ 3 月 に か け て 各 大 学 の 試 験 が 行 わ れ る 。

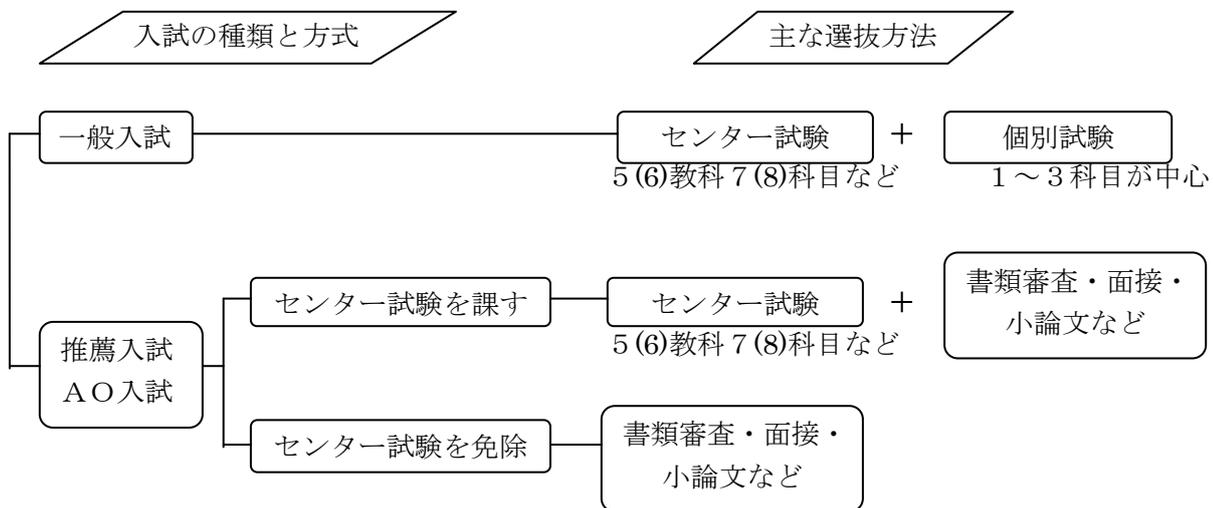
【 推 薦 ・ A O 入 試 】

小 論 文 や 面 接 な ど を 主 に 人 物 を 評 価 す る 。 選 考 時 期 は 早 く 推 薦 は 1 1 月 か ら 、 A O は 8 月 か ら ス タ ー ト す る 大 学 も あ る 。 近 年 ほ と ん どの 大 学 が 、 推 薦 ・ A O 入 試 に 於 い て も 、 学 力 を 問 う の で 受 験 学 力 上 上 は 必 須 で あ る 。

《 国 公 立 大 学 と 私 立 大 学 の 特 徴 》

国 公 立 大 と 私 大 は そ れ ぞ れ 入 試 に 特 徴 が あ り 、 対 策 も 異 な り 、 一 番 大 き な 違 い は 一 般 入 試 で の 出 題 教 科 ・ 科 目 数 で あ る 。

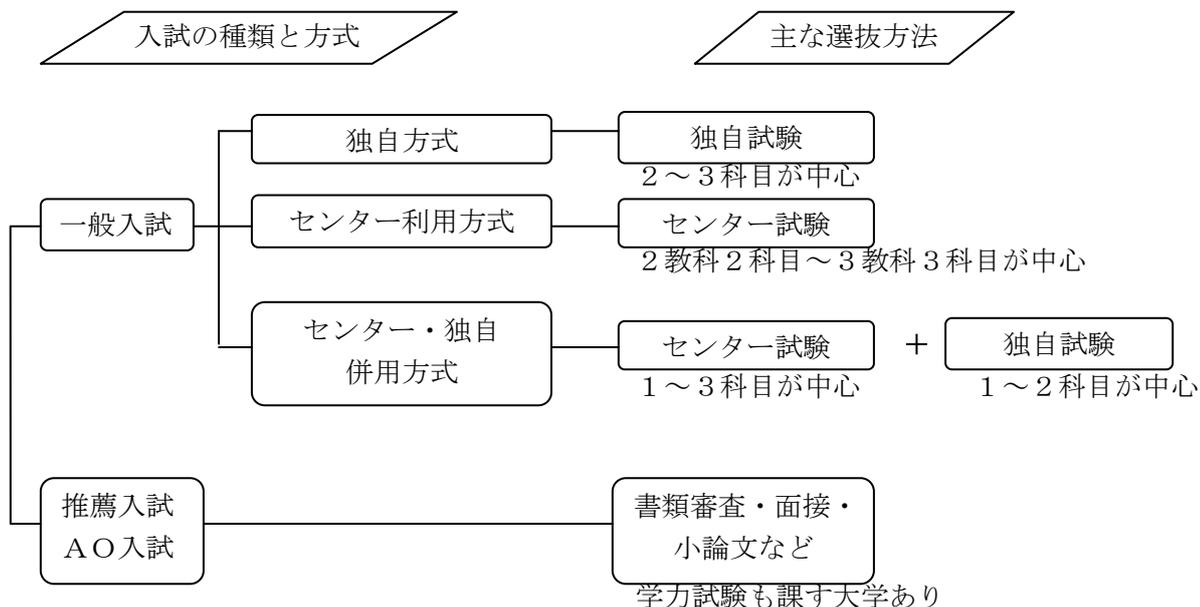
国 公 立 大 の 入 試 種 類



国 公 立 大 入 試 の 基 本 イ メ ー ジ

- ① センター試験は5 (6) 教科 7 (8) 科目など、教科・科目数が多い。
- ② 受験できる大学の数に限りがある (一般では 2 ~ 3 校) 。
- ③ 一般入試では、「センター試験」 + 「個別試験」の総合点で合否判定。
- ④ 推薦・AO入試は、「センターを課す」型と「免除する」型がある。

私立大の入試種類



私立大入試の基本イメージ

- ①何校でも受験が可能（推薦・AO入試で専願の場合を除く）
- ②一般入試は、大学独自の試験を行う「独自」、センター試験で選抜する「センター利用」、センター試験・独自試験の両方を組み合わせた「併用」の3方式がある。
- ③一般入試では全体的に国公立大より教科・科目数が少ない。
- ④短大は推薦・AO入試が募集定員の大半を占める。

2 大学入試センター試験について

毎年1月中旬に2日間にわたり、全国会場（本校生徒は千葉科学大 or 城西国際大）で55万人を超える受験生が一斉に受験する。

センター試験は大学受験生のほぼ全員が受験すると思ってよい。前図のとおり国公立・私立を問わず、センター試験の得点を合否判定に利用する入試が多いためである。

センター試験が大切な理由

【国公立大の場合】

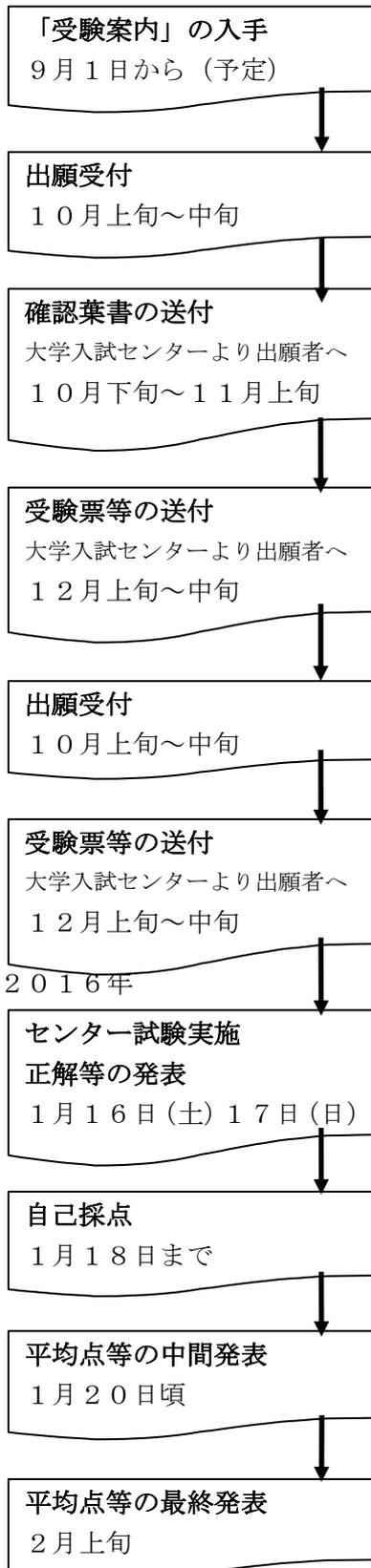
センター試験はほぼ必須である。一般入試では、ほとんどの大学が「センター試験＋個別試験」の総合得点で合否を判定する。推薦・AO入試でも「センター試験を課す」方式があり、その得点が選抜に利用される。

【私立大学の場合】

約9割の大学が一般入試で「センター利用方式」を実施している。センター試験の得点だけで各大学の合否判定が出、「独自方式」より受験料が割安になっている（独自方式＝3～3.5万円、センター利用方式＝1.5～2万円が多い）。

【センター試験の主なスケジュール】

2015年



2016年

【「受検案内」入手・出願】

現役生は受検案内入手及び出願は、所属高等学校が窓口になる。
受験科目「事前登録制」「第1解答科目」の導入により
①受験する教科名 ②「地歴」「公民」「理科」の受験する科目数を登録する。②は1科目か2科目かを登録する。(登録したら変更はできないので要注意)

【受験】

会場は千葉科学大学又は城西国際大。
問題冊子を持ち帰り可能、自己採点に備え、自分の解答を記入しておく。

【自己採点】

試験当日に発表される正解・配点を基に採点し、集計を行っている予備校へ提出。(生徒承諾確認をし、ベネッセ・河合・代ゼミ)

【各大学への出願】

自己採点の結果等を検討し各大学へ出願。
私立大の「センター利用方式」では、センター試験前に出願を締め切る大学も多いので要注意。

【試験科目・教科、時間・配点】

次項表参照

全6教科29科目から、出願する大学に必要な科目を選択・解答

【出題内容】

高校の教科書で対応できる内容。毎年前科目平均点は6割程度

【解答形式】

すべてマークシート方式

【各教科の選択の仕方】

最大で5(6)教科9科目の受験が可能、「5(6)」とは、「地歴・公民」は別教科となり、2科目選択の仕方教科数が変わる。
受験する大学の要件に合った科目を選択する。
教科・科目は次項表参照

2016年度 センター試験 出題教科&科目得点

教科	出題科目	試験時間/配点
国語	国語	80分/200点
地理歴史	世界史 A、世界史 B、日本史 A、日本史 B、地理 A、地理 B	1科目選択 60分/100点
公民	現代社会、倫理、政治・経済、倫理・政治・経済	2科目選択 130分/200点 ※解答時間 130分
数学①	数学Ⅰ、数学Ⅰ・A	1科目選択 60分/100点
数学②	数学Ⅱ、数学Ⅱ・B、工業数理基礎、簿記・会計、情報関係基礎	1科目選択 60分/100点
理科①	物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎	2科目選択 60分/100点
理科②	物理、化学、生物、地学	1科目選択 60分/100点
外国語	【筆記】英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語 【リスニング】英語選択者のみ	1科目選択 60分/100点 30分/50点

※理科は以下のいずれかの選択方法により科目を選択し、解答する。

A：理科①から2科目、B：理科②から1科目、C：理科①から2科目及び理科①から1科目

D：理科②から2科目

A及びBの選択の場合の解答時間は60分、C及びDの選択の場合には130分（解答時間は120分）

3 国公立大一般入試について

国公立大の一般入試は、ほとんどが「センター試験＋個別試験（2次試験）」の総合点で合否が決まる。個別試験とは、各大学が独自に実施する試験で、主に「前期日程」と「後期日程」の2回行われる。公立大の中にはわずかながら「公立大中期日程」を実施する大学もある（2014年は6大学6学部）。

各日程で出願できるのは1つだけであるため、受験のチャンスは前期・後期の2回、公立中期を入れても3回しかない。

まれではあるが、全日程終了後募集定員が満たされない場合、追加募集（2次募集）をかける大学もある（関東では2015年電通大社会人枠等）。

【受験パターン】

①前期＋後期 ②前期＋公立中期＋後期 ③前期＋公立中期 ④公立中期＋後期

多くの受験生が①のパターンになるはずである。

【各日程の特徴】

国公立大入試は「センター試験＝教科を幅広く課して基礎的な知識を問う」、「個別試験＝志願学科に関連する知識や意見を深く問う」の2段階のイメージである。

【前期・公立中期】

教科試験（筆記）が中心。文系は「英語、国語、数学、地歴・公民」、理系は「英語、数学、理科」の中から、1～3科目が多い。

【後期】

小論文、面接が多い。

【募集人員】

国公立一般入試全体で、前期78%、公立中期2%、後期20%と、前期が圧倒的に多い。

【出願スケジュール】（次項表参照）

2月私大の一般入試ピーク後に、国公立一般入試本番を迎える。年度末まで勝負が続く覚悟が必要となる。

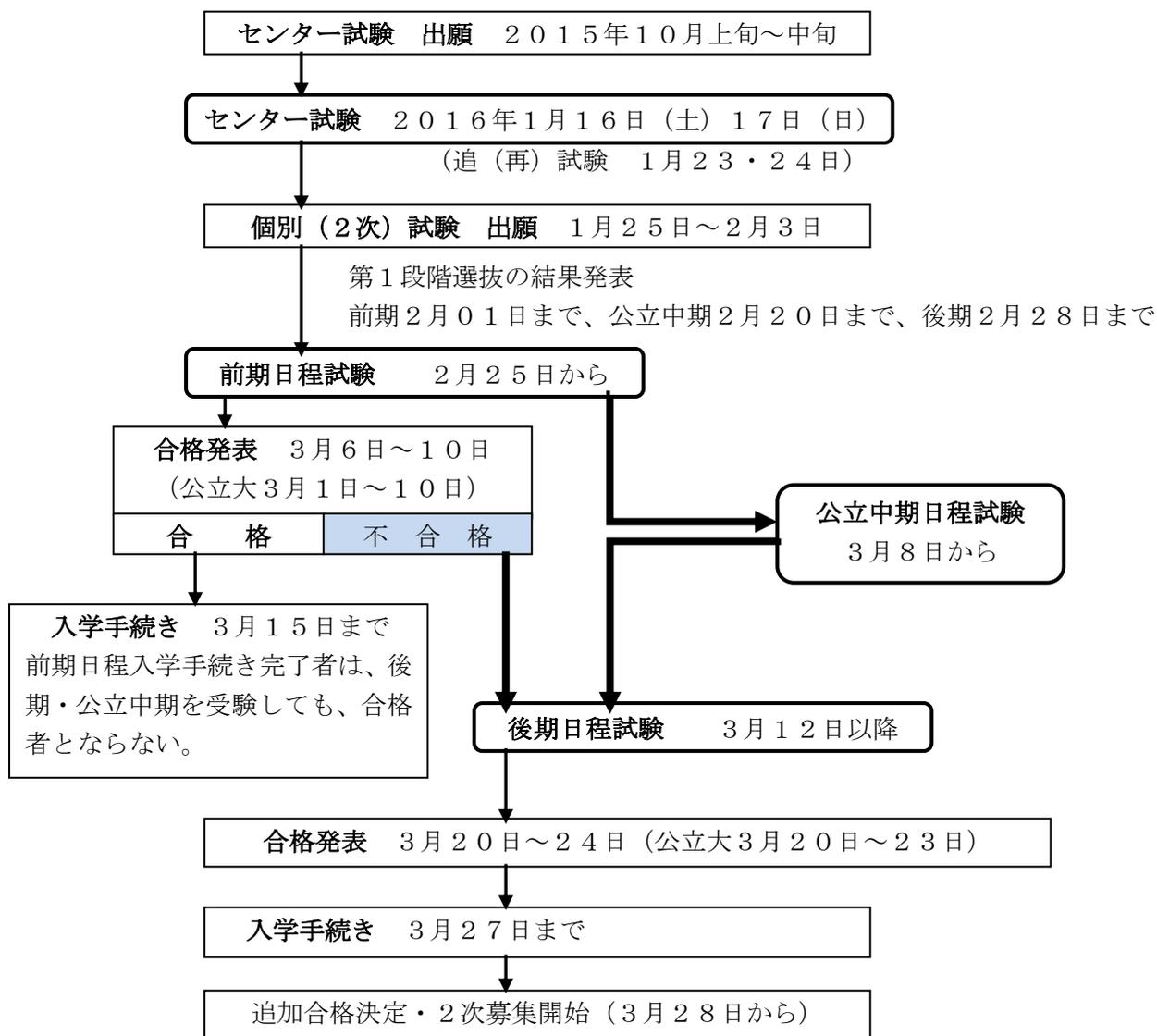
【出願】

1月25日～2月3日まで。センター試験の自己採点の結果を見ながら、「前期はこの大学、駄目だったら後期はこの大学」と確定し、各日程の出願を一斉に行う。

【試験日】

前期は2月25日から、公立中期は3月8日以降、後期は3月12日以降に行われる。
(第一段階選抜結果発表、前期：2月10日まで、中期：2月20日まで、後期：2月28日まで)

【2016年度 国公立大入試主なスケジュール】 → は併願の流れ



その他の制度・注意事項

【2段階選抜】

個別試験を受ける前に、センター試験の成績だけで選抜（第1段階選抜）される制度（足切り）。
ここでの不合格者は、“門前払い”を受けることになる。主に各大学があらかじめ発表した倍率を超える志願者が集まった場合行われる。

【第2志望登録】

各日程での出願は1つだけであるが、同じ学部内で第2志望の学科まで登録できる大学が多い。
第1志望の学科に不合格でも、第2志望で合格する可能性がある。

【前期のみの大学】

難関大を中心に一般入試での募集が「前期のみ」の学部も多い。後期募集を行わないため、「後期試験」で近隣の同系統の学部を受験生が集中することがある。

4 私立大一般入試について

入試方式

【独自方式】

2月上旬～中旬に行われる独自方式が各大学メインの入試で募集人員も多い。
志望校の出題傾向にあわせた対策が必要。

【センター利用方式】

約9割の大学が実施。センター試験で必要科目を受験しておけば、出願するだけで合否判定が出る。個々の大学の対策も必要なく、受験料も割安になる。ただし募集定員が少なく、「独自方式」より難易度が高くなる。

【センター・独自併用方式】

実施大学数は少ないが、近年増えつつある。「センター試験2科目＋独自試験1科目」などの選抜。独自試験は、上記「独自方式」の試験と共通の場合が多いので、①独自方式、②センター利用方式、③センター・独自併用方式の3つに出願できるメリットがある。

私立大の一般入試は、2月上旬～中旬がピークで、主に3月中旬まで行われる。志望度合いが高い大学を2月の独自方式でチャレンジし、センター利用方式で併願を組み立て、3月にリベンジを狙うのが、一般的な傾向である。

入試制度

各私立大は、さまざまな入試制度を用意している。自分のニーズにあった制度があるか、志望候補校を調べてみよう。

【試験日自由選択】

試験日が2～3日連続して設けられており、受験日を選択可能。併願大学との日程の調整が可能になる。また、すべての日程で受験にチャレンジすることもできる。

【全学部日程】

全学部や複数の学部の入試が、同一日程に共通問題で行われる。1回の受験で複数の学部にも併願できる大学が多い。

【学外試験会場】

大学外に設置された試験会場。遠隔地の大学でも近くの試験会場で受験できる。

【奨学生・特待生入試】

入試で成績が上位であれば、授業料などが減免される。減免額は「1年次授業料全額」、「半額」、「4年間授業料全額」など大学によりさまざまである。

【受験料割引】

同じ大学内で複数の出願をすると、受験料が割引される。例「1学科出願3万円、2学科出願5万円」や「独自方式（3万円）とセンター利用方式（1万5千円）の両方に出願すると3万5千円」など。

【第2志望登録】

出願時に第2志望の学科や専攻が登録できる。第1志望が不合格だった場合に、第2志望で判定が受けられる（第3・第4志望まで認める大学もある）。追加受験料はかからない。

【得意科目重視】

配点の高い科目（傾斜配点）を、実際の試験結果や受験生の事前申請で決めることができる。

入試科目・配点

大学により、さまざまなパターンがあり複雑だが、合否に大きく影響するため、入試要項を良く確認しておくことが重要である。

【科目・教科】

基本的には2～3教科が中心である。

文系：英語、国語、「地歴、公民、数学から1教科」

理系：英語、数学、理科

センター利用方式は、一般的に幅広い教科から選択可能。難関大を中心に5教科5科目以上を課す大学も増えている、国公立志望者の併願先となりやすい。

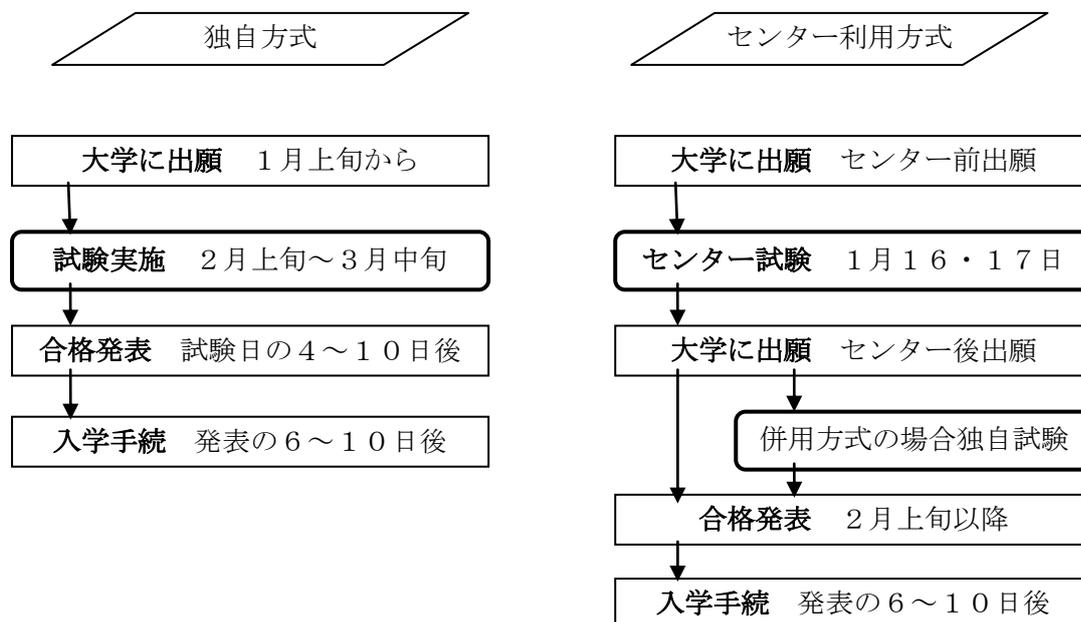
【配点】

各教科の満点のこと。例3教科受験で2教科が100点、1教科だけ200点（傾斜配点）などの場合、200点教科は特に重要となる（同じ大学でも入試方式により異なる場合がある）。

志望校選びや選抜方式選択のさい、得意科目が高配点の大学・選抜方式であれば有効になると考えてよい。

今の時点では、志望校に対して細かな入試方法を決める必要はない、現役生の場合、学力は試験前日まで伸びる。文系・理系の基本となる教科を丁寧に学習し、成果が表れてきた後で自分に有効な入試方式を絞り込んでいけばよい。

【2016年度 私立大一般入試スケジュール】



センター利用方式は、センター試験前に入願を締め切る「事前出願」と、試験後も出願可能な「事後出願」があり、大学によって異なる。

5 推薦・AO入試

推薦入試は「高等学校での活動実績」に、AO入試は「大学入学後の可能性」に重点が置かれている。そのため、推薦入試では、高校からの推薦書や出願条件に高校での評定平均値を求める大学が多い。

AO入試では不要な場合が多いが、面接・面談が複数回行われるなど、大学の「アドミッションポリシー（求める学生像）」や、志望学部への適性が見られる。近年ではAO入試でも、評定平均値を求める大学が多くなっている。

【選考方法】

推薦・AO入試共に、典型的な選考方法は以下の3つである。

- ◎書類審査…調査書や推薦書、志願理由書などの内容を評価する。
- ◎小論文……与えられたテーマについて論述するものと、文章や資料を読解して論述するものがある。
- ◎面接……個人面接とグループ面接がある。

【推薦入試】

大学が指定した高校からしか出願できない「指定校制」と、どの高校からも出願できる「公募制」、学校長の推薦の必要のない「自己推薦」の3種類がある。

選抜方法は大きく分けて以下の4タイプがある。国公立大は①②、私立大は①③④が多い。

①書類審査＋面接＋小論文

「国公立大（センター免除）・私立大で最も多い選抜法」

②書類審査＋面接＋センター試験

「国公立に多く5（6）教科7科目が中心だが3教科3（4）科目の大学もある」

③書類審査＋面接

「私立大で①に次いで多い」

④書類審査＋学力試験

「文系では英語・国語、理系では数学・理科・英語から1～2科目が多い。」

【AO入試】

AO入試は大学によって多様だが、選考の流れは大きく分けて以下の3タイプに分けられ国公立は①②、私立大は①③が多い。

①出願 ⇒ 選考（1次⇒2次） ⇒ 合格発表

「国公立大（センター免除）・私立大：2次試験で学力検査や口頭試問が行われることが多く、教科学習が必要である」

②出願 ⇒ 1次選考 ⇒ センター試験 ⇒ 2次選考 ⇒ 合格発表

「国公立大（センター課す）：5（6）教科7科目が中心だが3教科3（4）科目の大学もある」

③エントリー ⇒ 面談 ⇒ 出願 ⇒ 選考 ⇒ 合格発表

「私立大：エントリーシートを提出し、大学担当者と面談を通し、大学と互いに理解を深め、そのうえで出願する。事前にオープンキャンパスへの参加を条件づけている大学もあるので注意」

エントリーシートとは

志望理由や入学後の学習への意欲、高校での活動記録など、大学に対する“自己アピール書”である。エントリーシートは、面談や面接の時に大学側の資料になるので、しっかり書き、控え（コピー）を取っておくこと。

2016年度 推薦・AO入試スケジュール (代表例)

大学	入試方式	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
国 公 立 大	推薦	センター課す				出願		センター	合格発表 入学手続
		センター免除				出願	選考		合格発表 入学手続
	AO	センター課す				出願・1次選考(書類審査)		センター	合格発表 入学手続
		センター免除			出願・1次選考	2次選考			合格発表 入学手続
私 立 大	推薦				出願	選考		合格発表・手続	
	AO		エントリー・面談	出願・1次選考(書類審査)	2次選考			合格発表・入学手続	

※私立大のAO入試の日程は大学によりさまざま、3月まで続く大学もある。

6 各種・専門学校入試について

各種・専門学校入試では一部、医療・看護系等を除き推薦・AO入試が中心となる。

各入試時期も私立大と比較して約1カ月早まる。一般入試については、推薦入試と同時期に実施される学校が多い。

【選考方法】

推薦・AO・一般入試共に大きく分けて4タイプである。

医療・看護系は②③④、医療・看護系以外は①②が多い。

①書類審査 ②書類審査+面接 ③書類審査+小論文+面接 ④書類審査+学力試験+面接
体験入学・オープンキャンパス参加者は面接免除の学校もある。

【受験料割引】

体験入学・オープンキャンパス参加者は、受験料割引される学校もあるので、体験入学・オープンキャンパスには必ず参加すべきである。

【奨学生・特待生試験】

入試で成績が上位であったり、合格発表後別に試験を実施し、成績上位者に授業料などが減免される。減免額は「1年次授業料全額」、「半額」、「2～4年間授業料全額」など、実施する学校も増えている。

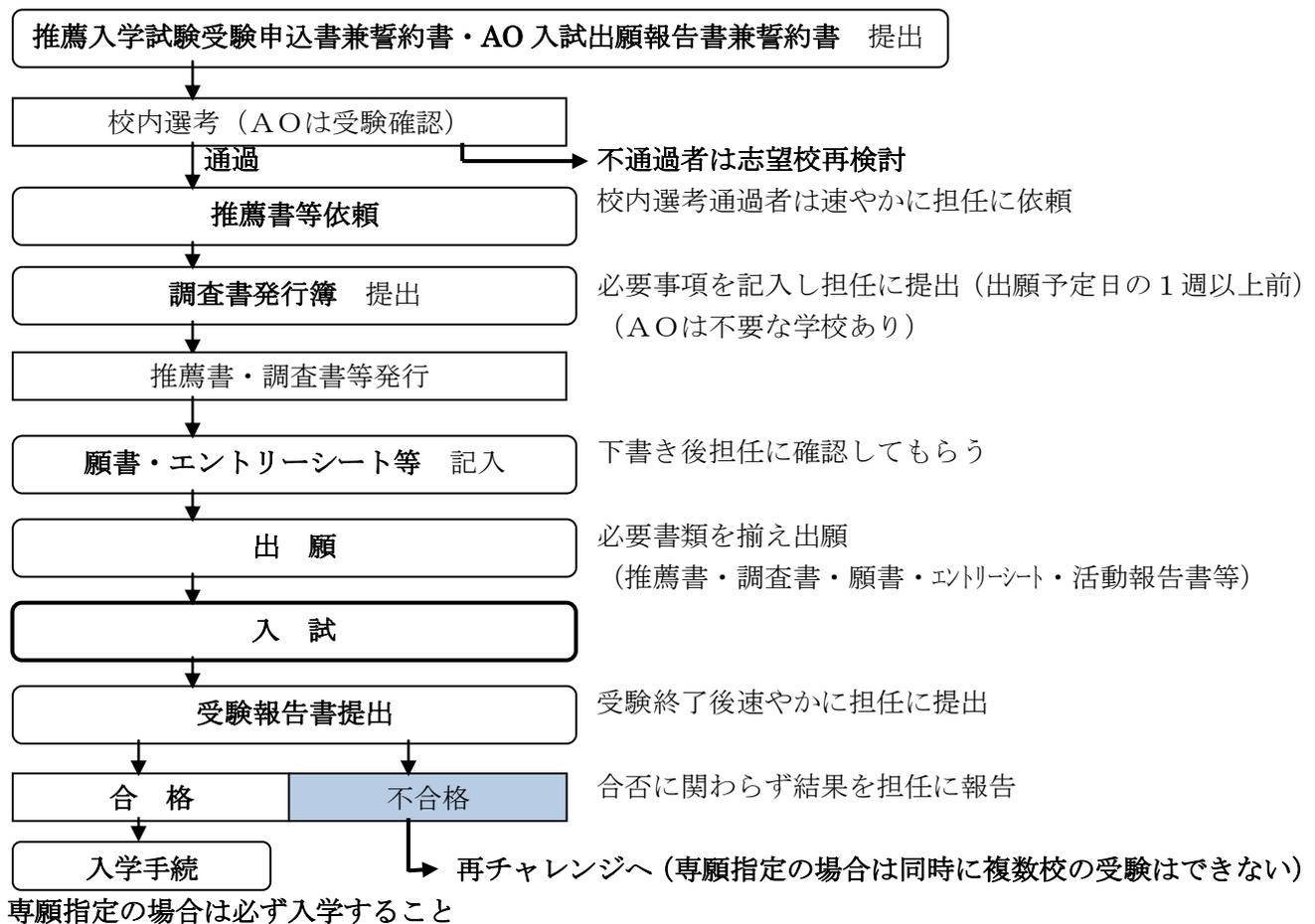
2016年度専門学校入試スケジュール

入試	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
AO	出願・選考								
					合格発表・手続き				
推薦					出願・選考				
					合格発表・手続き				
一般					出願・選考				
					合格発表・手続き				

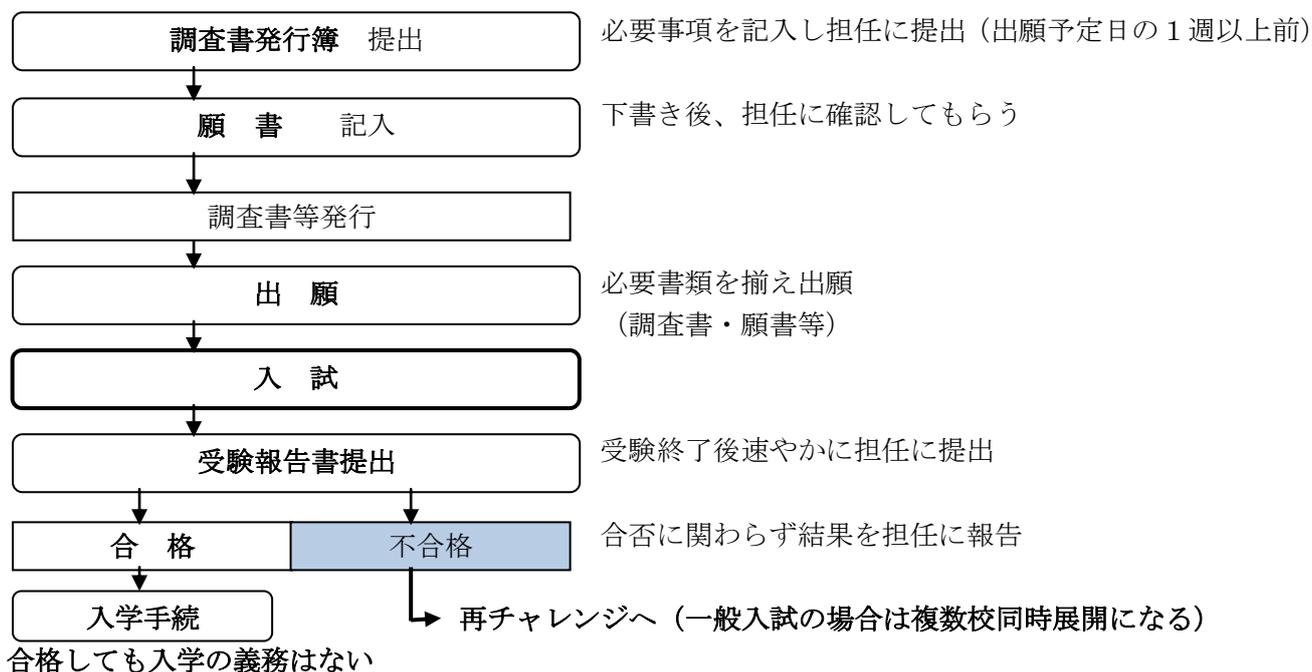
※専門学校入試では、各方式共に募集定員まで複数回、同じ入試が続く学校が多く、早い時期の出願が有利と考えてよい。

7 校内手続きについて

【推薦・AO入試】



【一般入試】



8 進学全般について

【各種・専門学校希望者】

各種・専門学校希望者は、大学進学希望者以上に、将来的な職業意識を持って進学に望むこと。

より専門的職業に就くための学校であるので、安易な気持ち（専門でいいや）で進学してしまうと、在学中の時間や学費が全く無駄なものになってしまう。

また、同じ系統の学校であっても、卒業後の就職状況の違いや就職決定率の違いも考慮し、体験入学等に複数校、足を運び進学先を決定すること。

【大学（短大）進学希望者】

いわゆる「安（安全）・近（近い）・短（短期間）」での学校選びはしないこと、目的を持って（この大学でこれを学びたい、どうしてもこの大学に入学したい等）、こだわりのある大学選びをしよう。

合格できそうだからAO・推薦ではなく、どうしても入学したいから、AO・推薦から駄目でも一般入試でチャレンジする、こだわりを持って志望校を決め、最後の最後まで諦めずチャレンジを続け合格を勝ち取ってこそ、将来の自分にとってプラスになるはずである。

AO・推薦入試で合格した者もセンター試験受験をしてもらいます、近年AO・推薦入学者の留年率・退学率が増加し問題となっています、早い段階で進路先が決まり、勉強をしなくなってしまい、最後まで頑張った一般受験組との、学力差が大きな要因とされています。大学は入学すればよい所ではない、入学後どのように学ぶかが大切である、早期に合格しても年度末まで継続した学習活動が大切である。